専門教育科目

前期課程 1期 英語学研究 I 音声学・音韻論

上田　功

授業概要並びに到達目標

言語の音韻現象を記述・分析しながら、その背後に潜む規則性を考察する。音韻理論の発展を辿りながら、一見無秩序に見える言語の音韻現象は、精緻な体系に基づいていることを見てゆきたい。基本的には概説的講義であるが、随時発展的問題に言及することもある。授業は、毎回テキストの指定された部分を読んできてもらい、英語や日本語を中心とする様々な言語の音韻データを分析しながら、ディスカッションを中心とする演習形式で進めてゆく予定である。受講者は言語学に関して、概論的な知識を有していることが必要である。
なお、第14回目の授業は、オンライン(双方向型)で実施する。

授業計画

最初に調音音声学の基本を復習した後、構造主義の音素論を経て、生成音韻論へと導入する。扱われる主たる項目は、以下の通りである。

1回目：音声学の位置付けと3つの下位分野
2回目：言語音声の生理的側面
3回目：言語音声の音響的側面
4回目：言語音声の知覚的側面
5回目：アメリカ構造主義音素論
6回目：音素論の限界と先生文法理論の台頭
7回目：生成音韻論の考え方
8回目：基底表示と音韻表示
9回目：動的音韻規則
10回目：規則の適用順序
11回目：有標性について
12回目：自然音韻論
13回目：音韻過程と音韻規則
14回目：音韻獲得、歴史的音韻変化
15回目：期末試験
16回目：なし

成績評価基準

テキストや参考文献などから、毎回かなりの量のリーディングアサインメントを課し(1回の授業につき、英文テキストや資料論文50ページ程度)、必ず全員がこれを読んできて、授業に参加する。アサインメントとして、しばしばデータを分析して提出してもらう。期末試験も行う。成績評価にあたっては、これらすべてを総合的に判断する。

教科書(参考書)

Kenstowicz, M. (1993) Phonology in Generative Grammar. Blackwell.　その他の論文を多数使用する。

前期課程 2期 英語学研究 II 音声学・音韻論

上田　功

授業概要並びに到達目標

言語の音韻現象を記述・分析しながら、その背後に潜む規則性を考察する。音韻理論の発展を辿りながら、一見無秩序に見える言語の音韻現象は、精緻な体系に基づいていることを見てゆきたい。英語学研究Iからの継続的トピックを議論する。基本的には概説的レベルの講義であるが、随時発展的問題に言及する。授業は、毎回テキストの指定された部分を読んできてもらい、英語や日本語を中心とする様々な言語の音韻データを分析しながら、ディスカッションを中心とする演習形式で進めてゆく予定である。受講者は英語学研究Iを履修済みか、同等の知識を有していることが求められる。
なお、第14回目の授業は、オンライン(双方向型)で実施する。

授業計画

最初に音素論、初期生成音韻論の考え方を復習した後、さまざまな形の非線状的音韻論や最適性理論へと進み、さらに音韻獲得等の応用分野へと導入する。特に近年興隆の著しい最適性理論の基本的な考え方に基づいて、音韻データの分析を試みたい。1)音韻過程、2)音節やモーラなどの音韻単位、3)弁別素性のあり方、4)素性不完全指定理論、5)素性階層理論、6)語彙音韻論、7)強勢とイントネーションなどである。最後に近年興隆の著しい最適性理論の基本的な考え方を概観することにしたい。

1回目：音素論と伝統的生成音韻論の復習
2回目：音節とモーラ
3回目：語強勢
4回目：句や文の強勢
5回目：イントネーション
6回目：非線状音韻論
7回目：多元的構造の考え方
8回目：素性階層理論
9回目：素性不完全指定理論
10回目：語彙音韻論
11回目：韻律音韻論
12回目：最適性理論
13回目：最適性理論の発展
14回目：動的音韻変化とエレメント理論
15回目：期末試験
16回目：なし

成績評価基準

テキストや参考文献などから、毎回かなりの量のリーディングアサインメントを課し(1回の授業につき、英文テキストや資料論文50ページ程度)、全員がこれを読んできて、授業に参加する。アサインメントとして、しばしばデータを分析して提出してもらう。期末試験も行う。成績評価にあたっては、これらすべてを総合的に判断する。

教科書(参考書)

Kenstowica, M. (1993) Phonology in Generative Grammar. Blackwell.　その他の論文を多く使用する。

前期課程 1期 英語学研究 Ⅲ 統語論

川原　功司

授業概要並びに到達目標

この講義は、形式統辞論の基礎を理解することで、学生がこの分野で使用される道具の使い方と基本的な考え方について身につけることを主眼とする。主に扱う話題は、生成文法の目標、品詞、構成素、統辞関係、束縛理論、句構造の一般化、機能範疇、主辞移動、A- 移動、A'- 移動、その他の統辞現象である。この講義では、形式統辞論の基礎を身につけるために、精密にテキストを読み、内容を把握し、批判的に分析できる基礎力を養う。そのためにチュートリアル方式を採用し、受講者は毎回の出題範囲についてハンドアウトを使用し、議論の素地を十全に準備してくることが求められる。最低でも、事前・事後学習として 3 時間以上の学習時間を想定している。なお、14回目はオンライン授業を予定している。

授業計画

第 1 回：イントロダクション
第 2 回：科学としての統辞論
第 3 回：認知科学としての統辞論、統辞論のモデル、言語能力と言語運用、言語とは？
第 4 回：言語の規則、普遍文法
第 5 回：言語理論、基礎的な用語
第 6 回：語と品詞、語彙範疇、機能範疇
第 7 回：下位範疇と素性、練習問題
第 8 回：樹形図
第 9 回：構成素
第10回：文法関係、支配、先行関係、C- 統御、文法関係
第11回：同一指示・先行詞、束縛、照応詞
第12回：代名詞、R- 表現、束縛理論
第13回：中間投射、句構造の一般化、パラメータと語順
第14回：機能範疇、決定詞、節、補文節(オンライン授業)
第15回：時制、相

成績評価基準

毎回のチュートリアルの出来100% で評価する。

教科書(参考書)

以下のテキストを使用する(ハードカバー、ペーパーバック、電子版、何でも可だが、第 4 版であることに注意)。

Carnie, Andrew. 2021. Syntax A Generative Introduction Forth Edition. Wiley Blackwell.

前期課程 2期 英語学研究 Ⅳ 統語論

川原　功司

授業概要並びに到達目標

この講義は、形式統辞論の基礎を理解することで、学生がこの分野で使用される道具の使い方と基本的な考え方について身につけることを主眼とする。主に扱う話題は、生成文法の目標、品詞、構成素、統辞関係、束縛理論、句構造の一般化、機能範疇、主辞移動、A- 移動、A'- 移動、その他の統辞現象である。この講義では、形式統辞論の基礎を身につけるために、精密にテキストを読み、内容を把握し、批判的に分析できる基礎力を養う。そのためにチュートリアル方式を採用し、受講者は毎回の出題範囲についてハンドアウトを使用し、議論の素地を十全に準備してくることが求められる。最低でも、事前・事後学習として 3 時間以上の学習時間を想定している。なお、14回目はオンライン授業を予定している。

授業計画

第 1 回：イントロダクション
第 2 回：項構造、レキシコン、虚辞、拡大投射原理
第 3 回：決定詞、本動詞、助動詞
第 4 回：主辞移動
第 5 回：名詞句の移動
第 6 回：Wh- 移動
第 7 回：局所制約
第 8 回：移動と通言語的な差、スコープ・非顕在的移動・最小連結条件
第 9 回：二重目的語構文
第10回：繰り上げ、コントロール、空範疇
第11回：削除
第12回：束縛理論の応用
第13回：抱合、編入、配置
第14回：併合(オンライン授業)
第15回：言語理論の目的

成績評価基準

毎回のチュートリアルの出来100% で評価する。

教科書(参考書)

以下のテキストを使用する(ハードカバー、ペーパーバック、電子版、何でも可だが、第 4 版であることに注意)。

Carnie, Andrew. 2021. Syntax A Generative Introduction Forth Edition. Wiley Blackwell.

前期課程 1期 英語学研究 V 意味論・語用論

上田　功

授業概要並びに到達目標

語用論は言語学の他部門を密接に関係する。この授業では語用論と音声･音韻とのインターフェイスを研究する。具体的には、英語のイントネーションの諸相を外観し、それが言語使用の場にいかに依存しているかを考察する。受講希望者は調音音声学の基本と言語学全般に関する基礎知識を有していることが求められれる。

毎回の授業は受講者による教科書の内容に関する発表に基づいて、全員で議論をしながら進めていく。毎回相当量の準備(テキストや指定の英語文献を約50ページ)が必要である。

なお、第14回目の授業は、オンライン(双方向型)で実施する。

授業計画

第１回：イントネーションの形式と機能
第２回：外国語習得とイントネーション
第３回：音調の種類(上昇、下降。下降上昇)
第４回：陳述文のイントネーション
第５回：疑問文のイントネーション
第６回：感嘆文・命令文・「間投文」とイントネーション
第７回：トーン連鎖
第８回：トーンの意味
第９回：音調核の配置
第10回：配置の基本原則
第11回：内容語と機能語
第12回：複合語
第13回：旧情報と新情報
第14回：広焦点と狭焦点
第15回：まとめ

成績評価基準

毎回の発表(40%)、議論への貢献度(20%)、学期末のレポート(40%)により評価する。

教科書(参考書)

Wells, J. (2006) English Intonation. Cambridge University Press.

前期課程 2期 英語学研究 VI 意味論・語用論

上田　功

授業概要並びに到達目標

語用論は言語学の他部門を密接に関係する。この授業では語用論と音声･音韻とのインターフェイスを研究する。具体的には、１学期に引き続き英語のイントネーションの諸相を外観し、それが言語使用の場にいかに依存しているかを考察する。受講希望者は調音音声学の基本と言語学全般に関する基礎知識を有していることが求められれる。

毎回の授業は受講者による教科書の内容に関する発表に基づいて、全員で議論をしながら進めていく。毎回相当量の準備が必要である。

なお、第14回目の授業は、オンライン(双方向型)で実施する。

授業計画

第１回：機能語と核
第２回：核が配置されないイントネーション句末
第３回：句動詞とイントネーション
第４回：イベント文
第５回：旧情報への核付与
第６回：「既知」であること
第７回：音調句の設定
第８回：グループ分けと統語構造
第９回：限定と非限定、並列構造
第10回：付加疑問文
第11回：前核部の構造
第12回：各音調の種類
第13回：焦点領域
第14回：様々な使用場面におけるイントネーション
第15回：まとめ

成績評価基準

毎回の発表(40%)、議論への貢献度(20%)、学期末のレポート(40%)により評価する。

教科書(参考書)

Wells, J. (2006) English Intonation. Cambridge University Press.

前期課程 1期 英語教育法研究 I 言語習得論

高梨　芳郎

授業概要並びに到達目標

英語教育に関する研究能力と英語授業実践に関わる専門的能力を養うことを目標にする。この授業では、第二言語教授・学習における言語習得、学習者要因、伝達能力と言語技能、評価について、英語学と英語教育学の研究成果をふまえて、理論と実践の両面から研究を行う。具体的には、研究論文等を読み、内容について理解を深め、批判的に分析を行うとともに教育実践への示唆を得る。併せて、英語教育の研究法についても理解を深めるようにする。

第１回～第13回、第15回の授業は対面で行う。第14回はオンライン(Google Meet での同時双方向型)で行う。受講登録をした受講生には大学の電子メールで授業の前日までに Google Meet の URL を連絡する。

授業計画

第１回　授業内容の説明と計画

第２回　研究方法（質的研究・量的研究・混合法）
第３回　言語習得（先行研究）
第４回　言語習得（研究結果）
第５回　言語習得（考察と課題）
第６回　学習者要因（先行研究）
第７回　学習者要因（研究結果）
第８回　学習者要因（考察と課題）
第９回　伝達能力と言語技能（先行研究）
第10回　伝達能力と言語技能（研究結果）
第11回　伝達能力と言語技能（考察と課題）
第12回　評価（先行研究）
第13回　評価（研究結果）
第14回　評価（考察と課題）
第15回　研究課題の整理と考察

成績評価基準

授業中の取り組み、課題への対応状況、レポートの成績を総合的に判断して行う。

教科書（参考書）

教科書は使用しない。資料を配付する。
参考書については初回の授業で説明する。

前期課程 2期　英語教育法研究 Ⅱ　教育方法論

高梨　芳郎

授業概要並びに到達目標

英語教育に関する研究能力と英語授業実践に関わる専門的能力を養うことを目標にする。この授業では、第二言語教授・学習における言語習得過程、指導理論と指導法、伝達能力と４技能、テスト法について、英語学と英語教育学の成果をふまえて、教育方法論の研究を行う。具体的には、内外の研究論文、教育実践の研究論文を読み、内容について理解を深め、批判的に分析を行うとともに教育実践の課題解決に向けて研究成果の活用を検討する。併せて、英語教育の研究法についても理解を深めるようにする。

第１回～第13回、第15回の授業は対面で行う。第14回はオンライン（Google Meet での同時双方向型）で行う。受講登録をした受講生には大学の電子メールで授業の前日までに Google Meet の URL を連絡する。

授業計画

第１回　授業内容の説明と計画
第２回　研究方法（理論研究、実験研究、実践研究）
第３回　言語習得過程（先行研究）
第４回　言語習得過程（研究結果の分析）
第５回　言語習得過程（研究成果の活用）
第６回　指導理論と指導法（先行研究）
第７回　指導理論と指導法（研究結果の分析）
第８回　指導理論と指導法（研究成果の活用）
第９回　伝達能力と４技能（先行研究）
第10回　伝達能力と４技能（研究結果の分析）
第11回　伝達能力と４技能（研究成果の活用）
第12回　テスト法（先行研究）
第13回　テスト法（研究結果の分析）
第14回　テスト法（研究成果の活用）
第15回　研究課題の整理と考察

成績評価基準

授業中の取り組み、課題への対応状況、レポートの成績を総合的に判断して行う。

教科書（参考書）

教科書は使用しない。資料を配付する。

前期課程 1期　英語教育法研究 Ⅲ　外国語学習理論１

田地野　彰

授業概要並びに到達目標

〈授業概要〉
講義では第二言語習得に関与する様々な要因について考究する。第二言語習得研究についての多様な研究成果を詳細に分析、解釈することにより、日本における外国語習得の現状理解および今後の研究方法などについての理解を深めるものとする。

〈到達目標〉
第二言語習得関係の研究論文などを理論的、批判的に読むアカデミックな読解力を養成する。事前学習にはテキスト本文の内容読解、テキスト内容への批判的思考などで180分以上が必要となる。

授業計画

第１回　Language, Learning, and Teaching (1) Questions about SLA
第２回　Language, Learning, and Teaching (2) Language and Teaching
第３回　Language, Learning, and Teaching (3) Three Perspectives on SLA
第４回　First Language Acquisition (1) Behavioral Approach
第５回　First Language Acquisition (2) Nativist Approach
第６回　First Language Acquisition (3) Functional Approach and Issues in FLA
第７回　Age and Acquisition (1) The Critical Period Hypothesis
第８回　Age and Acquisition (2) Cognitive and Affective Considerations
第９回　Age and Acquisition (3) Linguistic Considerations
第10回　Human Learning (1) Fundamental Concepts in Language Learning

第11回　Human Learning (2) Language Aptitude
第12回　Human Learning (3) Learning Theories
第13回　Individual Differences (1) Learning Styles
第14回　Individual Differences (2) Learning Strategies
第15回　Individual Differences (3) Strategies-Based Instruction

成績評価基準

成績評価は発表と課題など(50%)および学期末レポート(50%)で行うものとする。

教科書(参考書)

・Lightbown, P.M. & Spada, N. (2013) How Languages Are Learned. (OUP)　ISBN-13: 978-0194541268

参考図書
・鈴木孝明・白畑知彦(2012)『ことばの習得―母語獲得と第二言語習得』(くろしお出版)ISBN978-4-87424-544-6
・新多　了・馬場今日子(2016)『はじめての第二言語習得論講義』(大修館)ISBN978-4469246087

前期課程 2期 | 英語教育法研究 Ⅳ 外国語学習理論2

田地野　彰

授業概要並びに到達目標

〈授業概要〉
本授業では外国語学習に関わる諸要因を扱った研究を概観し、外国語学習研究の全体像について考究する。外国語学習論におけるこれまでの研究の歴史や概要についてまとめた論文や専門書を通して、基本的な概念を理解し、批判的思考力や読解力の育成をめざす。事前学習には論文の要旨作成などを含め180分以上が必要である。(参考文献は「教科書欄」に掲載。)

〈到達目標〉
英語教育・指導の観点から外国語学習に関する研究成果の活用についての理解を深める。

〈授業方法〉
基本的に対面にて授業を行います(第14週目の授業はオンラインで実施予定)。なお、資料の配信については Google Classroom を使う予定です。

授業計画

第１回　SLA 理論
第２回　SLA の研究方法
第３回　第二言語知識の本質
第４回　第二言語教室でのインタラクション
第５回　フォーカス・オン・フォーム
第６回　第二言語教室における社会文化理論
第７回　文法の習得
第８回　文法の習得(教育的示唆)
第９回　語彙の習得
第10回　発音の習得
第11回　語用知識の習得
第12回　ISLA の環境
第13回　個人差と ISLA
第14回　研究と教育実践のつながり
第15回　指導への示唆

成績評価基準

成績評価は、発表や課題など(50%)、および最終レポート(50%)で行うものとする。

教科書(参考書)

〈教科書〉
佐野富士子ほか(2022)『学びの場での第二言語習得論』(開拓社)ISBN978-4-7589-2362-0

〈参考図書・資料〉
Ellis, R. (2015) Understanding Second Language Acquisition. (OUP) ISBN-13: 978-0194422048
Loewen, S. (2020) Introduction to Instructed Second Language Acquisition (2nd ed.). Routledge. ISBN: 978-1138-67178-2

前期課程 1期 | 英語教育法研究 Ⅴ 英語教育と異文化間コミュニケーション

古村　由美子

授業概要並びに到達目標

授業概要：
本授業では、外国語教育全般について世界的な視点から概観し、これまでの外国語教育の流れと異文化コミュニケーション能力の関係について考究する。具体的には、外国語教育とアイデンティティとの関連、外国語教育の目的・可能性、異文化コミュニケーション能力と外国語学習、研究方法、外国語教育におけるナショナリズムとインターナショナリズム、ヨーロッパにおける言語学習について理解を深め、批判的思考を行いて議論し、問題点と今後の展望について考察する。

授業方法：
第14回目は Zoom にてオンライン授業を実施。それ以外の授業は対面で行います。
事前に各回の授業内容を要約し、その内容を基に批判的思考を用いて議論します。

授業計画

1　オリエンテーション　批判的思考について
2　コンテクストの中の外国語教育(外国語教育の定義と政策)
3　コンテクストの中の外国語教育(外国語教育の評価と立案)
4　外国語教育の目的(外国語教育がもたらす恩恵)
5　外国語教育の目的(具体的な目的の事例)/ 外国語学習は学

校教育の中で可能なのか(政策立案者のねらい)
6　外国語学習は学校教育の中で可能なのか(義務教育修了時における到達目標)
7　相互文化的話者（二文化併用について）
8　相互文化的話者(相互文化的に行動すること)
9　相互文化的能力と小学校における外国語学習(コンテクストと学習内容)
10　相互文化的能力と小学校における外国語学習(初等教育における文化の学習とカリキュラム)
11　分析型研究と提唱型研究(外国語教育の文化的側面についての研究)
12　分析型研究と提唱型研究(文化学習の方向性)/外国語におけるナショナリズムとインターナショナリズム(言語教育者と外国語教育者)
13　外国語におけるナショナリズムとインターナショナリズム(社会化と社会的アイデンティティ)
14　ヨーロッパにおける言語学習(言語とアイデンティティ)
15　ヨーロッパにおける言語学習(ヨーロッパ人アイデンティティと言語学習)

成績評価基準

各回の授業内容を要約(70%)、課題・議論への参加度(30%)

教科書(参考書)

教科書：
『相互文化的能力を育む外国語教育―グローバル時代の市民性形成をめざして』バイラム、マイケル【著】細川 英雄【監修】/山田 悦子 / 古村 由美子【訳】大修館書店　3080円(税込)

参考書：From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship: Essays and Reflections　Michael Byram（著）　Multilingual Matters Ltd
(図書館所蔵)

前期課程 2期 英語教育法研究 Ⅵ 英語教育と異文化間コミュニケーション

古村　由美子

授業概要並びに到達目標

本授業では、著者が提唱している「相互文化的市民性」(Intercultural Citizenship)という概念に関連づけて、言語教育の様々な側面について概観する。多様な文化の混在する社会において、他者と民主的に共生できるようになるための「市民性」の意義、その育成のための教育方法、方針、カリキュラム、評価についての著者の考えを理解し、批判的思考を用いて分析する。この「市民性」形成と異文化コミュニケーション学習を英語教育においてどう実践するかについて考察を広げる。関連する論文を読み、理解し、今後の展望について議論する。

授業方法
第14回目は Zoom にてオンライン授業を実施。それ以外の授業は対面で行う。
事前に各回の授業内容を要約し、その内容を基に批判的思考を用いて議論します。

授業計画

1　オリエンテーション　批判的思考について
2　政治行動としての外国語学習(言語教師育成教育)
3　政治行動としての外国語学習(教師養成指導者のための教育)
4　言語教育、政治教育、相互文化的市民性(クリティカルな文化意識)
5　言語教育、政治教育、相互文化的市民性(概念に関する相対主義と言語相対主義)
6　相互文化的市民性を育てる教育(政治教育と言語教育の枠組み)
7　相互文化的市民性を育てる教育(４つの関連する原理)
8　相互文化的市民性教育のための方針(市民とその共同体)
9　相互文化的市民性教育のための方針(国民国家を超える市民性教育)
10　相互文化的市民性教育のためのカリキュラム(教育における超国家的政治的活動)
11　相互文化的市民性教育のためのカリキュラム(相互文化的に行動する段階)
12　相互文化的能力と相互文化的市民性のアセスメントと評価(Assessment と Evaluation)
13　相互文化的能力と相互文化的市民性のアセスメントと評価(ポートフォリオとプロフィール)/英語教育における異文化コミュニケーション学習の位置づけ
14　論文の要約
15　論文の分析

成績評価基準

各回の授業内容を要約(70%)、課題・議論への参加度(30%)

教科書(参考書)

教科書：
『相互文化的能力を育む外国語教育―グローバル時代の市民性形成をめざして』バイラム、マイケル【著】細川 英雄【監修】/山田 悦子 / 古村 由美子【訳】大修館書店　3080円(税込)

参考書：From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship: Essays and Reflections　Michael Byram（著）　Multilingual Matters Ltd
(図書館所蔵)

前期課程 1期 英米文化研究 Ⅰ アメリカの小説と文化

梅垣　昌子

授業概要並びに到達目標

20世紀の前半にハリウッドの脚本家としても活動していたアメ

リカ南部の作家ウィリアム・フォークナーは、架空の土地ヨクナパトーファを舞台とする作品を多数執筆しノーベル文学賞を受賞した。また東西の冷戦期にアメリカ政府の文化広報活動に関わり、日本をはじめとする世界各地を訪れている。この授業では、フォークナーおよびフォークナーの影響を受けた作家たちの作品を精密に読み込むことにより、グローバル化時代における地域性および空間と場所の概念について考察する。また、フォークナー作品の読解にあたって重要な語りの問題に注目し、語られる内容と語られ方の関係性について考察を深める。その過程で和文および英文の文学批評を熟読し、適切な様式を用いながら先行研究を踏まえた論文作成をめざす。毎回の授業のための準備として作品や資料の読解および読解内容についての考察が必須である。

授業計画

第１回　講義内容の説明と計画
第２回　物語の構造分析１（19世紀アメリカ文学の系譜）
第３回　物語の構造分析２（20世紀アメリカ文学の系譜）
第４回　物語の構造分析３（モダニズムとポストモダニズム）
第５回　フォークナーとアメリカ南部：作品の読解１（The Country）
第６回　フォークナーとアメリカ南部：作品の読解２（The Village）
第７回　フォークナーとアメリカ南部：作品の読解３（The Wilderness）
第８回　フォークナーとアメリカ南部：作品の読解４（The Wasteland）
第９回　フォークナーとアメリカ南部：作品の読解５（The Middle Ground）
第10回　フォークナーとアメリカ南部：作品の読解６（Beyond）
第11回　フォークナーと文学批評１（フォークナーと日本１）
第12回　フォークナーと文学批評２（フォークナーと日本２）
第13回　フォークナーと文学批評３（フォークナーとラテンアメリカ）
第14回　フォークナーと文学批評４（フォークナーとヨーロッパ）　→この回のみオンライン（ZOOM）で遠隔授業を行います
第15回　まとめと考察：研究課題と成果の確認

成績評価基準

授業準備の成果をふまえた授業中の取り組みと考察結果の発表（40％）および３回のレポート課題（60％）により総合的に評価する。

教科書（参考書）

１）William Faulkner. Collected Stories. Vintage 2009.
２）随時資料を配布する
３）参考書については授業で課題ごとに指定する

前期課程 2期　英米文化研究 Ⅱ　アメリカの小説と文化

梅垣　昌子

授業概要並びに到達目標

20世紀の前半にハリウッドの脚本家としても活動していたアメリカ南部の作家ウィリアム・フォークナーは、架空の土地ヨクナパトーファを舞台とする作品を多数執筆しノーベル文学賞を受賞した。また東西の冷戦期にアメリカ政府の文化広報活動に関わり、日本をはじめとする世界各地を訪れている。この授業では、小説家としてだけでなく、脚本家としても活躍したフォークナーの作品を精密に読み込むことにより、技術革新の時代における表現方法の可能性と多様性について考察する。また、フォークナー作品の読解にあたって重要な語りの問題に注目し、語られる内容と語られ方の関係性について考察を深める。その過程で和文および英文の文学批評を熟読し、適切な様式を用いながら先行研究を踏まえた論文作成を行う。毎回の授業のための準備として作品や資料の読解および読解内容についての考察が必須である。

授業計画

第１回　講義内容の説明と計画
第２回　アメリカ文学とナラトロジー１（モダニズムとポストモダニズム）
第３回　アメリカ文学とナラトロジー２（長編と短編）
第４回　アメリカ文学とナラトロジー３（映像作品）
第５回　作品の読解１（The Country）“Barn Burning”
第６回　作品の読解２（The Village）“Dry September”
第７回　作品の読解３（The Wilderness）“Lo!”
第８回　作品の読解４（The Wasteland）“Turnabout”
第９回　作品の読解５（The Middle Ground）“Mountain Victory”
第10回　フォークナーとアメリカ南部：作品の読解６（Beyond）“Carcassonne”
第11回　フォークナーと文学批評１　伝記的アプローチ（導入）
第12回　フォークナーと文学批評２　伝記的アプローチ（実践）
第13回　フォークナーと文学批評３　作品論（導入）
第14回　フォークナーと文学批評４　作品論（実践）　→この回のみオンライン（ZOOM）で遠隔授業を行います
第15回　まとめと考察：研究課題と成果の確認

成績評価基準

授業準備の成果をふまえた授業中の取り組みと考察結果の発表（40％）および期末レポートとその準備に向けた課題（60％）により総合的に評価する。

教科書（参考書）

１）William Faulkner. Collected Stories. Vintage 2009.
２）随時資料を配布する
３）参考書については授業で課題ごとに指定する

前期課程 1期 英米文化研究 Ⅲ イギリス文化論

岡田　新

授業概要並びに到達目標

イギリス現代史の専門書を読み、イギリスの現代政治の形成についてデスカッションする。
google classroom で連絡を行う。
John Grigg Lloyd George War Leader, 1915-1918を分担して読み、訳をつくり、固有名詞などをしらべて注をつける。
疑問点をあげ、デスカッションを通じてイギリス現代政治の形成の諸論点について理解を深める

授業計画

1　introduction　授業の仕方　ウエールズとロイド・ジョージ
2　Background　19世紀末から20世紀初頭のロイド・ジョージ
3　Background　第一次大戦とロイドジョージ
4　講読と討論　Extreme danger
5　講読と討論　War Cabinet
6　講読と討論　Conference at Calais
7　講読と討論　Crisis at Sea
8　講読と討論　America Comes in
9　講読と討論　Nivelle's Nemesis
10　講読と討論　Electoral Reform
11　講読と討論　Farming and Food
12　講読と討論　Honours
13　講読と討論　Haig gets His Way
14　講読と討論　New Appointment（オンライン授業）
15　講読と討論　Arthur Henderson and Neville Chamberlain

成績評価基準

平常点　50%
レポート 50%

教科書（参考書）

John Grigg, Lloyd George War Leader　1916—1918　プリントで配布する

前期課程 2期 英米文化研究 Ⅳ イギリス文化論

岡田　新

授業概要並びに到達目標

イギリス現代史の専門書を読み、イギリスの現代政治の形成についてデスカッションする。
google classroom で連絡を行う。
John Grigg Lloyd George War Leader, 1915-1918を分担して読み、訳をつくり、固有名詞などをしらべて注をつける。
疑問点をあげ、デスカッションを通じてイギリス現代政治の形成の諸論点について理解を深める

授業計画

1　introduction　第一次大戦の意義
2　Background　戦間期の特質
3　Background　ロイド・ジョージの没落
4　講読と討論　Lloyd George's Boswell
5　講読と討論　War from the Air
6　講読と討論　Passchendaele
7　講読と討論　Clemenceau
8　講読と討論　The House party
9　講読と討論　Allied Conclaves
10　講読と討論　The Balfour Declaration
11　講読と討論　Manpower
12　講読と討論　Speeches
13　講読と討論　Rhonda and Rationing
14　講読と討論　Robertson Goes（オンライン授業）
15　講読と討論　Before the Storm

成績評価基準

平常点　50%
レポート 50%

教科書（参考書）

John Grigg, Lloyd George War Leader　1916—1918　プリントで配布する

前期課程 1期 日本語学研究 Ⅰ 日本語学概論

早津　恵美子

授業概要並びに到達目標

●授業概要：日本語の文法構造について概観したあと、日本語の具体的な言語現象をめぐって考察する。
●到達目標：日本語の文法現象について「規則・きまり」を受動的に覚えるというのでなく、自らが話したり書いたり聞いたり読んだりする日本語について、その実態を内省しながら考えることによって、そこにひそむ法則的なものを見いだしていく力を身につける。
●授業形態：第14週の授業は zoom によるオンライン（リアルタイム）、それ以外の週は対面で行う。Google classroom に授業サイト「【院】日本語学概論（2023-1 火１）」を設け、授業に関する連絡、資料や課題の提示等に使用する。初回授業の前日までに、履修登録者の nufs のメールアドレス宛に Google Classroom の招待メールを送るので、各自でアクセスして準備すること。第14週目の授業（zoom）へのアクセス方法も Google Classroom で知らせる。

授業計画

1）授業の説明と計画
2）単語と文
3）文法とは
4）文の内部構造

5）品詞と文の成分
6）品詞の転成
7）語彙的な意味と文法的な性質ー単語の語彙的な意味
8）語彙的な意味と文法的な性質ー単語の文法的な意味
9）語彙的な意味と文法的な性質ー 単語のカテゴリカルな意味
10）単語のもつ文法的な性質ー形態論的な性質
11）単語のもつ文法的な性質ー形態論的なカテゴリー
12）単語のもつ文法的な性質ー構文論的な性質
13）単語のもつ文法的な性質ー構文論的なカテゴリー（命題的）
14）単語のもつ文法的な性質ー構文論的なカテゴリー（陳述的）
※ zoom によるオンライン授業
15）まとめと理解度の確認

成績評価基準

次の割合を目安に、総合的に判断する。授業への貢献（50%）、レポート（50%）。

教科書（参考書）

なし。

前期課程 2期 日本語学研究 Ⅱ 日本語談話研究

近藤　有美

授業概要並びに到達目標

〈授業概要〉
談話の構造と社会構造間の関係に焦点を当て、社会に潜む矛盾や不公正と向き合う「批判的談話研究」について学ぶ。そして、日本語教育の文脈において自明のことのように扱われている「ことばの正しさ」について、批判的談話研究の立場から考察を行う。
〈準備学習〉
毎回、指定された論文を読み、課題に取り組んだ上で授業に参加する必要がある。そのため、毎週180分ほどの準備学習が必要となる。

授業計画

〈授業形態等〉
第14週のみオンラインで、その他は対面形式で行う。オンラインへのリンク情報、受講生への諸連絡は、Google Classroom で行う。履修者の確認ができた時点で Google Classroom への招待を行うので、授業開始前に承諾しておくこと。履修登録しているにも関わらず、授業開始の前日になっても招待が届かない場合は、授業担当者にメールで問い合わせること。

第１回　受講ガイダンス、「ことば」と「人」と「社会」について
第２回　批判的談話研究とは何か
第３回　批判的談話研究と談話分析研究
第４回　敬語研究のイデオロギー批判（内容理解）
第５回　敬語研究のイデオロギー批判（クラスディスカッション）
第６回　ネイティブ・スピーカー再考（内容理解）
第７回　ネイティブ・スピーカー再考（クラスディスカッション）
第８回　ブラジル日系人の言語使用（内容理解）
第９回　ブラジル日系人の言語使用（クラスディスカッション）
第10回　異文化間交流の批判的談話分析（内容理解）
第11回　異文化間交流の批判的談話分析（クラスディスカッション）
第12回　地域日本語教育に関する批判的談話研究１（内容理解）
第13回　地域日本語教育の批判的再検討（内容理解）
第14回　〈オンライン〉地域日本語教育の批判的再検討（クラスディスカッション）
第15回　批判的談話研究と日本語教育　／　まとめ

成績評価基準

Google Classroom への投稿課題　30%
発表　30%
授業内ディスカッション　30%
最終課題　10%

教科書（参考書）

【テキスト】
野呂香代子・山下仁（2009）『新装版「正しさ」への問い―批判的社会言語学の試み―』三元社
※参考文献に関しては、必要に応じて授業内で紹介する。

前期課程 1期 日本語学研究 Ⅲ 日本語音声学・音韻論

中北　美千子

授業概要並びに到達目標

◆資料の提示や連絡のために classroom を使用するので、第１回授業までに履修登録者の NUFS メールに招待を送ります。第14週はオンライン授業で、zoom を使用します。

音声データの分析や音声を刺激とした実験に関心のある学生を対象として、音声学および音韻論の基礎知識と、実際に音声信号を分析するための基礎的な技術を身につけてもらうことを目標とする。
人間の音声産出のメカニズム、物理的な信号としての音声の特徴、日本語話者の音声知覚の特性など、日本語の話し言葉の物理的側面と心理的側面について、要点を概説する。また、音響信号分析用のソフトウェアを利用して、実際に音声を録音して分析する演習を行う。受講生は各自ノート PC 持参のこと（できるだけ Mac ではなく Windows の PC を用意すること）。
受講者の知識や関心に応じて進度や内容を調整する。

授業計画

第１回：受講ガイダンス
第２回：発声の仕組み
第３回：日本語の母音
第４回：調音の仕組みと日本語の子音

第５回：音声記号
第６回：音声と音韻
第７回：確認テスト１（母音と子音）
第８回：音声信号の特性
第９回：音声分析のための基礎知識（母音と子音）
第10回：音声分析のための基礎知識（スペクトログラム）
第11回：アクセントの型
第12回：複合語のアクセント
第13回：イントネーション
第14回：（オンライン）確認テスト２（アクセントとイントネーション）
第15回：まとめ

成績評価基準

以下の割合を目安に総合的に判定する。
確認テスト１・２（50％）
授業貢献度（50％）

教科書（参考書）

講義時に必要に応じて資料を配付し、参考文献を紹介する。

前期課程 2期 日本語学研究 V 日本語学特論

中北　美千子

授業概要並びに到達目標

◆資料の提示や連絡のために classroom を使用するので、第１回授業までに履修登録者の NUFS メールに招待を送ります。第14週はオンライン授業で、zoom を使用します。

日本語の文法現象や語用論的現象が話し言葉においてどのような音声的特徴をもって実現されているかを観察するための多様な視点と手法を学ぶことを目標とする。話し言葉の分析や音声刺激を使った実験に必要な技術の基礎を学び、演習や文献講読を行う。また、音響分析用のソフトウェアを利用して、実際に音声を録音して分析する演習を行うので、受講生は各自ノートPC 持参のこと。
受講者の知識や関心に応じて進度や内容を調整する。

授業計画

第１回：受講ガイダンス
　　モーラと発話速度
　　文献購読準備
第２回：アクセント型と複合語のアクセント（PC 持参）
第３回：イントネーションの山とプロミネンス（PC 持参）
　　発話機能・文末表現・文末イントネーション
第４回：文献講読（アクセント・イントネーション）
第５回：文献講読（フィラー・感動詞・文末表現）
第６回：文献講読（ノイズ・非流暢性）
第７回：文献講読（その他）
第８回：話し言葉の分析演習（発話速度・ポーズ）
第９回：話し言葉の分析演習（アクセント・イントネーション）
第10回：話し言葉の分析演習（フィラー・感動詞・文末表現・ノイズ・非流暢性）
第11回：話し言葉の分析演習（その他）
第12回：分析結果発表（①さん・②さん）
第13回：分析結果発表（③さん・④さん）
第14回：（オンライン）分析結果発表（⑤さん・⑥さん）
第15回：分析結果発表（予備）

成績評価基準

以下の割合を目安に総合的に判定する。
分析結果発表（50％）
授業貢献度（50％）

教科書（参考書）

講義時に必要に応じて資料を配付し、参考文献を紹介する。

前期課程 1期 日本語学研究 VII 日本語文法論

早津　恵美子

授業概要並びに到達目標

●授業概要：語彙と文法（構文論と形態論）とが関わる様々な現象を確認し、語彙と文法をつなぐ要としてのカテゴリカルな意味について詳説し参加者と議論する。
●到達目標：語彙の研究と教育においても文法の研究と教育においてもカテゴリカルな意味の理解が重要であることを具体的な現象の分析を通じて身につける。
●授業形態：第14週の授業は zoom によるオンライン（リアルタイム）、それ以外の週は対面で行う。Google classroom に授業サイト「【院】日本語文法論（2023-1 火２）」を設け、授業に関する連絡、資料や課題の提示に使用する。初回授業の前日までに、履修登録者の nufs のメールアドレス宛に Google Classroom の招待メールを送るので、各自でアクセスして準備すること。第14週目の授業（zoom）へのアクセス方法も Google Classroom で知らせる。

授業計画

●内容は以下のような予定である。ただし、参加者との相談によって微調整することがある。
１）ガイダンス：授業の説明と計画
２）単語の語彙的な意味
３）単語の文法的な意味
４）単語のカテゴリカルな意味
５）文法的な意味とカテゴリカルな意味
６）構文論と形態論
７）単語の形態論的な性質（命題的）とカテゴリカルな意味
８）単語の形態論的な性質（陳述的）とカテゴリカルな意味
９）単語の構文論的な性質とカテゴリカルな意味
10）単語の多義性とカテゴリカルな意味
11）語彙的な意味の多側面性とカテゴリカルな意味

12）単語の類義性とカテゴリカルな意味
13）単語の対義性とカテゴリカルな意味
14）複合語とカテゴリカルな意味
※ zoom によるオンライン授業
15）まとめと理解度の確認

成績評価基準

次の割合を目安に、総合的に判断する。授業への貢献(50%)、レポート(50%)。

教科書(参考書)

プリント・資料を配布する。

前期課程 2期 日本語学研究 Ⅸ 日本語語彙論

早津　恵美子

授業概要並びに到達目標

●授業概要：単語は語彙・文法的な単位であり、単語には語彙的な性質と文法的な性質がある。本授業では、主として語彙的な性質(単語の意味、意味の体系、文体的な性質、位相、語種、語構成、等)について、配布資料をもとに考察する。
●到達目標：日本語の語彙の性質について内省力や理解力が深まる。
●授業形態：第14週の授業は zoom によるオンライン(リアルタイム)、それ以外の週は対面で行う。Google classroom に授業サイト「【院】日本語語彙論(2023-2 火１)」を設け、授業に関する連絡、資料や課題の提示に使用する。初回授業の前日までに、履修登録者の nufs のメールアドレス宛に Google Classroom の招待メールを送るので、各自でアクセスして準備すること。第14週目の授業(zoom)へのアクセス方法も Google Classroom で知らせる。

授業計画

1）ガイダンス：授業の説明と計画
2）語彙・文法的な単位としての単語
3）単語の意味
4）単語の意味の多義性と多側面性
5）品詞
6）品詞の転成
7）単語の体系(同義語・類義語)
8）単語の体系(対義語・上位 / 下位)
9）単語の文体的特徴と位相
10）語種
11）語種と意味
12）語構成
13）語構成と意味
14）慣用句の単位性
※ zoom によるオンライン授業
※ zoom によるオンライン授業
15）まとめと理解度の確認

成績評価基準

次の割合を目安に、総合的に判断する。授業中の分担発表と議論への貢献(50%)、学期末のレポート(50%)。

教科書(参考書)

プリント・資料を配布する。

前期課程 1期 日本語教育学研究 Ⅰ 第二言語習得論

近藤　行人

授業概要並びに到達目標

Ⅰ期では、認知的アプローチに基づく第二言語習得研究を概観し、日本語教育研究者としての高度な研究能力養成を目指す。日本語教育の基礎科学として位置付けられる第二言語習得研究と日本語教育実践とのつながりについても受講生と議論して考えていく。
授業では、言語習得観、第一言語の影響、IIO モデル、個人差要因、教室習得研究について扱う。それぞれの分野における研究論文等を読み、内容について理解を深め、批判的に分析を行うとともに、研究手法や教育実践についての示唆を得る。

授業計画

第１回　オリエンテーション
SLA 研究の歴史意義
第２回　母語習得に関する２つの理論：原理とパラメーターのアプローチと用法基盤モデル
第３回　SLA における第一言語の影響(1)
第４回　SLA における第一言語の影響(2)
第５回　Krashen のモニターモデルから IIO モデルへ
第６回　個人差要因　年齢
第７回　個人差要因　適性
第８回　個人差要因　学習スタイル、学習ストラテジー、ビリーフ
第９回　個人差要因　動機づけ
第10回　教室における SLA(1)文法
第11回　教室における SLA(2)Focus on form
第12回　教室における SLA(3)語彙
第13回　教室における SLA(4)CBI と CLIL
第14回　SLA 研究の方法
※第14回の講義は ZOOM によるオンライン双方向形式で実施します。
第15回　まとめと振り返り

成績評価基準

授業参加度(30%)、授業内課題・発表(40%)、レポート(30%)

教科書(参考書)

参考書
※ 特定の教科書は使用しないが、以下の書籍を参考書とする。
小柳かおる(2021)『日本語教師のための新しい言語習得概論(改

訂版)』スリーエーネットワーク
鈴木孝明・白畑智彦(2012)『言葉の習得：母語獲得と第二言語習得』くろしお出版
Shawn Loewen (2022)『学びの場での第二言語習得論』佐野富士子、齋藤英敏、長崎睦子他(訳)、開拓社
Edinbugh University press.
Atkinson, D. (Ed). (2011) Alternative approaches to second language acquistion. Routledge.
馬場今日子・新多了(2020)『はじめての第二言語習得論講義：英語学習への複眼的アプローチ』大修館書店

前期課程 2期 日本語教育学研究 Ⅱ 第二言語習得論

近藤　行人

授業概要並びに到達目標

第二言語習得研究においては多くが「認知」的な研究である。しかし、近年は第二言語習得研究の分野でも社会的転回が提唱され、言語学習の社会的側面を捉えることができるようになった。このような流れの中で、第二言語習得においても非認知的な視点を持った理論、実践、研究が求められている。本講義では、第二言語習得における社会的転回により台頭してきた社会文化的アプローチ、複雑系理論、アイデンティティ、生態学的アプローチなどについて理解を深め、それぞれの領域における研究の展開について議論する。

授業の一部では、論文講読を行う。講読文献の担当箇所について各自が、内容の要点と論点を提示したレジュメを作成し、各自の担当部分の説明と議論を重ねて実施する。

授業計画

第１回　オリエンテーション
　　第二言語習得研究における社会的転回
第２回　第二言語習得と生態学的アプローチ(1)
第３回　第二言語習得と生態学的アプローチ(2)
第４回　第二言語習得と生態学的アプローチ(3)
第５回　第二言語習得と複雑系理論(1)
第６回　第二言語習得と複雑系理論(2)
第７回　第二言語習得と社会文化的アプローチ(1)
第８回　第二言語習得と社会文化的アプローチ(2)
第９回　第二言語習得と社会文化的アプローチ(3)
第10回　第二言語習得と社会文化的アプローチ(4)
第11回　第二言語習得とアイデンティティのアプローチ(1)
第12回　第二言語習得とアイデンティティのアプローチ(2)
第13回　第二言語習得とアイデンティティのアプローチ(3)
第14回　第二言語習得とアイデンティティのアプローチ(4)
　　※第14回の講義は ZOOM によるオンライン双方向形式で実施します。
第15回　社会的転回後の第二言語習得研究

成績評価基準

授業参加(30%)、授業内課題･発表(40%)、期末レポート(30%)

教科書(参考書)

参考書
Block, D (2003)The social Turn in Second Language Acquisition

前期課程 1期 日本語教育学研究 Ⅲ 日本語教育評価法

近藤　行人

授業概要並びに到達目標

【授業概要】
日本語学習を評価することは、日本語学習の成果や学習者の成長を何らかの物差しで測ることである。この授業では、教育現場の実務において必要な評価の基礎知識と評価の実際についての様々な問題を取り上げる。学習者の学びを適切に評価するための手法を学び、どうすれば有用性の高い評価ができるのか、その手続きや実際の評価を通して検討し、その手法を修得する。
【到達目標】
日本語教育の評価に関する基礎的な知識を身に付け、実際の教育現場における評価を実施することができるようになる。
【準備学習】
講師から課される課題の取り組みなど、授業外でも他の履修者と協働して準備するなどの学習が求められる。

授業計画

１回　オリエンテーション　評価のイメージ
２回　教育評価についての基礎知識(1) 診断的評価、形成的評価、総括的評価、
　　目標基準テスト・集団準拠テスト、相対的評価・絶対的評価
３回　教育評価についての基礎知識(2) コミュニケーション能力
４回　教育評価についての基礎知識(3)　シラバスの役割・成績判定と報告・有用性・波及効果
５回　テストを作る(1) テスト方針の決定、テストデザインの決定、テスト細目表、
　　問題案の作成、問題案の検討、実施要項作成
６回　パフォーマンステスト(1) タスク(ロールプレイとスピーチ)
７回　パフォーマンステスト(2) 評価基準
８回　言語能力の指標　CEFR･JF スタンダード
９回　関連論文講読　CEFR に関する関連論文
10回　関連論文講読　Can-do Statements に関する評価
11回　パフォーマンステストの実施と評価
12回　テストを作る(2) テストの問題例：文法・語彙・文字のテスト
13回　テストを作る(3) テストの問題例：読解テスト・聴解テスト
14回　関連論文講読　評価者特性による評価のずれ
　　※第14回の講義は ZOOM によるオンライン双方向形式

で実施します。
15回　テストを作る(4) テストをテストする

成績評価基準

授業への貢献度(20%)、課題(40%)、最終レポート(40%)で行う予定である。

教科書(参考書)

教科書なし
参考書：
・近藤ブラウン妃美(2012)『日本語教師のための評価入門』くろしお出版
・村上京子他 (2013)『テストを作る』スリーエーネットワーク
・国際交流基金 (2011)『学習を評価する』国際交流基金
・野口裕之・大隅敦子(2014)『テスティングの基礎理論』研究社

前期課程 2期 日本語教育学研究 Ⅳ 日本語教育評価法

近藤　行人

授業概要並びに到達目標

【概要】
Ⅱ期では、対話や協働を扱う評価や社会文化的アプローチによる評価、教室を離れた評価などの様々な「新しい評価」とされる文献を講読する。講読する文献は基本的には講師が選ぶが、受講者の希望等により、取り上げる内容を調整し、興味関心に沿った論文を講読することもある。
【準備学習】
発表準備等や、取り上げる論文を読むため、毎回１～２時間程度の準備を要する。受講者が準備する資料に基づいて教室活動を行うので、分担内容に責任を持つようにすること。

授業計画

１回　オリエンテーション
２回　文献講読「アセスメントの歴史と最近の動向」
３回　文献講読「CEFR における評価とアセスメント」
４回　文献講読「ピアラーニングとアセスメント」
５回　文献講読「ポートフォリオアセスメント」
６回　文献講読「対話的アセスメントの実践研究」
７回　文献講読「ジャーナルアプローチとアセスメント」
８回　文献講読「「外国人が書いた日本語手紙文」に対する日本人の評価態度の多様性」
９回　文献講読「「よい話し合い」のイメージはどのように形成されるか」
10回　文献講読「非母語話者は母語話者の「説明」をどのように評価する」
11回　文献講読「ある成人韓国人の価値観に影響を与えた日本での経験」
12回　文献講読「外国人とのやりとりの経験は日本人の言語使用の意識を変えるか」
13回　文献講読「学生の評価観を理解する」
14回　文献講読「学習につながる自己評価―「生活のための日本語」教育の可能性―」
※第14回の講義は ZOOM によるオンライン双方向形式で実施します。
15回　まとめ　各自の研究の発表(調査、結果)、相互フィードバック

成績評価基準

授業への貢献度(20%)、担当箇所の発表(40%)、最終レポート(40%)で行う予定である。

教科書(参考書)

教科書なし
参考書
・佐藤慎二・熊谷由里他(2010)『アセスメントと日本語教育新し評価の理論と実践』くろしお出版
・宇佐美洋(編) (2015)『「評価」を持って街に出よう「教えたこと・学んだことの評価」という発想を超えて』くろしお出版

前期課程 1期 日本語教育学研究 Ⅴ 日本語教育実践研究

近藤　有美

授業概要並びに到達目標

本コースでは、言語教育実践者として「自分はどのような教育実践を目指すのか」という問いを各自が追究し、それを他者と議論することを通して、自己研修型教師(自らの実践を振り返って省察し、成長し続ける教師)の育成を目指す。授業では、さまざまな言語教育実践の報告を講読し、それらをもとにクラスでディスカッションを行う。
論文講読課題として、論文を読み、Google Classroom に「疑問点」「ディスカッションしたい内容」等を授業前にアップロードしておくこと、また、他の学生が Google Classroom にあげた内容についても目を通し、授業でディスカッションできるよう準備しておくことが求められる。
論文講読、ディスカッション内容の検討等、180分程度の事前準備を必要とする授業である。

授業計画

〈授業形態等〉
第14週のみオンラインで、その他は対面形式で行う。オンラインへのリンク情報、受講生への諸連絡は、Google Classroom で行う。履修者の確認ができた時点で Google Classroom への招待を行うので、授業開始前に承諾しておくこと。履修登録しているにも関わらず、授業開始の前日になっても招待が届かない場合は、授業担当者にメールで問い合わせること。
第１回　コースのオリエンテーション／教育観に関するディスカッション
第２回　第１章：なぜ今対話なのか　〈内容理解〉
第３回　第１章：なぜ今対話なのか　〈クラスディスカッション〉

第４回　第１章：なぜ今対話なのか　〈まとめ〉
第５回　第２章：対話のためのテーマとは何か　〈内容理解〉
第６回　第２章：対話のためのテーマとは何か　〈クラスディスカッション〉
第７回　第２章：対話のためのテーマとは何か　〈まとめ〉
第８回　第３章：対話をデザインする　〈内容理解〉
第９回　第３章：対話をデザインする　〈クラスディスカッション〉
第10回　第３章：対話をデザインする　〈まとめ〉
第11回　第４章：対話をすることばの市民へ　〈内容理解〉
第12回　第４章：対話をすることばの市民へ　〈クラスディスカッション〉
第13回　第４章：対話をすることばの市民へ　〈まとめ〉
第14回　〈オンライン〉著者との対話セッション
第15回　クラスディスカッション「学習者主体と言語教育」／まとめ

成績評価基準

論文講読課題（30％）、発表（20％）、ディスカッションへの参加・貢献（30％）、レポート（20％）

教科書（参考書）

細川英雄（2019）『対話をデザインする―伝わるとはどういうことか』ちくま新書
※その他、参考文献に関しては授業内で紹介する。

前期課程 2期 | 日本語教育学研究 Ⅵ 日本語教育実践研究

近藤　有美

授業概要並びに到達目標

本授業では、日本語教育において近年注目が集まっている「表現活動」に焦点を当て、関連論文を講読し、言語教育における表現活動の背景にある理論や意義を学ぶ。
論文講読課題として、論文を読み、Google Classroom に「疑問点」「ディスカッションしたい内容」等を授業前にアップロードしておくこと、また、他の学生が Google Classroom にあげた内容についても目を通し、授業でディスカッションできるよう準備しておくことが求められる。
論文講読、ディスカッション内容の検討等、180分程度の事前準備を必要とする授業である。

授業計画

〈授業形態等〉
第14週のみオンラインで、その他は対面形式で行う。オンラインへのリンク情報、受講生への諸連絡は、Google Classroom で行う。履修者の確認ができた時点で Google Classroom への招待を行うので、授業開始前に承諾しておくこと。履修登録しているにも関わらず、授業開始の前日になっても招待が届かない場合は、授業担当者にメールで問い合わせること。
第１回　コースのオリエンテーション／教育観に関するディスカッション
第２回　第１章：表現活動主導の日本語教育（内容理解）
第３回　第１章：表現活動主導の日本語教育（クラスディスカッション）
第４回　第２章：思考と表現の往還から学習者主体へ（内容理解）
第５回　第２章：思考と表現の往還から学習者主体へ（クラスディスカッション）
第６回　第３章：表現活動の深層を探る（内容理解）
第７回　第３章：表現活動の深層を探る（クラスディスカッション）
第８回　第４章：意味と学びのデザイン（内容理解）
第９回　第４章：意味と学びのデザイン（クラスディスカッション）
第10回　第５章：日本の教育改革とバフチンの対話（内容理解）
第11回　第５章：日本の教育改革とバフチンの対話（クラスディスカッション）
第12回　第６章：学校教育における表現活動（内容理解）
第13回　第６章：学校教育における表現活動（クラスディスカッション）
第14回　〈オンライン〉第１章著者との対話セッション
第15回　日本語教育と表現活動に関するディスカッション／まとめ

成績評価基準

論文講読課題（30％）、発表（20％）、ディスカッションへの参加・貢献（30％）、レポート（20％）

教科書（参考書）

西口光一（2020）『思考と言語の実践活動へ―日本語教育における表現活動の意義と可能性』ココ出版
※参考文献に関しては、必要に応じて授業で紹介する。

前期課程 2期（集中） | 日本語教育学研究 Ⅶ データ分析法

籠宮　隆之

授業概要並びに到達目標

総合研究Ⅱに引き続き、文科系の大学院生を対象とした、統計学の授業である。
本講座では、フリーの統計ソフトである「R」を用いた統計処理を学ぶ。
また、多変量解析を用いたデータ解析手法についても学ぶ。
集中講義ではあるが、コンピュータを用いた実習形式で進める予定である。
なお、総合研究Ⅱ（量的研究法）と併せて受講することが望ましい。

授業計画

以下の項目について、受講者の進度と関心に合わせ、取捨選択しながら授業を進める。

（15コマ）

1．総合研究Ⅱの復習（記述統計）
2．総合研究Ⅱの復習（統計的検定）
3．二元配置分散分析
4．相関係数の有意性検定と統計的検定における効果量
5．統計ソフトＲの基本的な使い方（プログラム言語の基礎概念を含む）
6．統計ソフトＲを用いた統計的検定（t 検定）
7．統計ソフトＲを用いた統計的検定（分散分析と多重比較）
8．回帰分析の基礎
9．統計ソフトＲを用いた回帰分析（単回帰分析、重回帰分析、変数選択）
10．統計ソフトＲを用いた様々な回帰分析（非線形回帰分析）
11．統計ソフトＲを用いた多変量解析（主成分分析）
12．統計ソフトＲを用いた多変量解析（因子分析）
13．統計ソフトＲを用いた多変量解析（判別分析）
14．受講者自身の研究テーマに則った実習１
15．受講者自身の研究テーマに則った実習２

成績評価基準

受講者各自の研究テーマに則って統計的な分析を行ったレポートにより評価する。

教科書（参考書）

教科書：
栗原伸一（2011）『入門統計学―検定から多変量解析・実験計画法まで―』、オーム社
山田剛史・杉澤武俊・村井潤一郎（2008）『R によるやさしい統計学』、オーム社
参考書：
金明哲（2007）『R によるデータサイエンス - データ解析の基礎から最新手法まで』、森北出版

前期課程 1期 日本文化研究Ⅰ 日本文化論

齋藤　絢

授業概要並びに到達目標

【授業概要並びに到達目標】
本授業では、近現代に時間軸を置き、国際関係論の視座から文化を捉え、考えていくための方法論を学ぶことを目標とする。授業では、習得した理論を用いて近現代の日本社会における文化接触・変容の過程についてディスカッションを重ね、終盤では文化触変についてプレゼンテーションをおこなう。

【授業方法】
・使用ツール：Google classroom
・授業前に NUFS メールで class コードを伝達するので、各自 classroom に「参加」する体制を整えておくこと。

授業計画

第１回　授業の概要説明と各週のスケジュール確認、受講者の学習背景
第２～４回　文化的諸要素に関する概念
①文化の概念
②文化概念に関する文献講読－１
③文化概念に関する文献後続－２
第５回　「ことばと文化」「言語と文化」（３）文献紹介，ディスカッション　文化の視野を広げる
第６回　文献講読（１）　第２章「国際関係における文化」
国際関係における文化：平野健一郎 (2000)『国際文化論』東京大学出版会
第７回　文献講読（２）　第３章「文化の変化」
１．内発的変化と外発的変化
２．文化進化論
第８回　文献講読（３）
３．文化変容論
第４章　「文化の接触と変容－文化触変」
１．アカルチュレーン研究の登場
第９回　文献講読（４）
２．外来文化要素の伝播と選択
３．文化運搬者
第10回　講義「日本の近代化と異文化接触」
第11回　プレゼンテーションに向けて（１）
日本文化をテーマとし、文化触変についてプレゼンテーションをおこなう（報告＋ディスカッション）
例）ことば・言語・生活文化・文化芸術活動・大衆文化・信仰／宗教など、テーマを軸にグループを組む
プレゼンテーションの趣旨：文化に対する複眼的な視野と知識を共有し、日本社会・日本文化に対する思考を深めていくためのグループ内ディスカッション、また全体のディスカッションの活性化を目指したい。
第12回　「主要文献の収集状況の確認，テーマの具体化」
考察ポイントについてのディスカッション
第13回　「PPT，配布資料の準備，質疑応答の準備」
第14回　「プレゼンテーション（１）」（オンライン）
報告時間：30分
論点の整理とディスカッションの準備（10分）
ディスカッション：40分
フィードバック：10分
第15回　「プレゼンテーション（２）」「全体のまとめ」
報告時間：30分
論点の整理とディスカッションの準備（10分）
ディスカッション：30分　フィードバック：10分

成績評価基準

課題20％、プレゼンテーション30％、レポート50％

教科書（参考書）

授業内容に応じて参考文献を紹介し、資料を配布する。

前期課程 2期 日本文化研究 Ⅱ 日本文化論

齋藤　絢

授業概要並びに到達目標

地理的条件からも日本は隣国・韓国との歴史的関係が高い。国際・マスメディア・集団・小集団・対人などのコミュニケーションレベルでの関係性の構築において、両国の文化関係に対する認識を深めることは、現代日本の社会を考え、理解していくことへと繋がる。本授業では､現代の日韓文化関係について、大衆文化に関する両国の文化政策と文化交流の現場を中心に、日韓両国がどのように文化的関係性を構築してきたのかを、日本語・韓国語文献の収集と講読、ディスカッションを通じて学ぶ。

授業計画

【重要】

・履修者確定後､Google classroom に招待するので NUFS メールをよく確認してください。

・授業に関するお知らせは Google classroom のストリームに投稿します。

・classroom にアクセスし、シラバスの詳細、授業進行の方法、授業資料等を各自確認してください。

==========

各週学習テーマ

第１回　授業の概要説明と各週のスケジュール確認、受講者の学習背景

第２回　文化の理論、日韓文化関係

第３回　大衆社会と文化１―大衆文化(講義)

第４回　大衆社会と文化２―映像の視聴(1)

第５回　大衆社会と文化３―映像の視聴(2)

第６回　大衆文化論に関する文献講読：学習者１
文化論／異文化接触／大衆文化を中心とした学術分野のなかで学習者の研究テーマに関連した文献を選択し、文献紹介・ディスカッションのテーマ共有を中心に授業を展開する。

第７回　大衆文化論に関する文献講読：〃

第８回　大衆文化論に関する文献講読：学習者２

第９回　大衆文化論に関する文献講読：〃

第10回　大衆文化論に関する文献講読：学習者３

第11回　大衆文化論に関する文献講読：〃

第12回　大衆文化論に関する文献講読：学習者４

第13回　大衆文化論に関する文献講読：〃

第14回　日韓文化関係についてディスカッション―戦後の日韓関係と文化政策、日流・韓流(オンライン)

第15回　全体のまとめ

成績評価基準

各回授業参加への積極性…15%

文献講読(文献紹介、小発表の質、議論の質)…35%

レポート…50%

教科書(参考書)

講義内容に応じて参考文献を紹介し、資料を配布する。

前期課程 1期 日本文化研究 Ⅲ 日本文学研究

エリス　俊子

授業概要並びに到達目標

・日本語表現の様々なかたちと、その可能性について、詩の分析を通して考える。メッセージの伝達を重視する言語使用とは異なり、詩の言語は、言葉で表現できないものを言葉で表現するという原理的な矛盾を抱えている。直接的な表現法を避けることによって、詩の言語はどのような効力を持ち得ているのか。言葉の狭間にある意味を読み取るとき、言語の向こうに何が見えるのか。具体的な詩作品を読み進めながら考えてみたい。短い詩を１週間に１篇のペースで取り上げる予定。

・発表とディスカッションを中心に授業を進める。事前知識は必要ない。日本文学になじみのない人、初めて詩を読む人も歓迎する。

準備学習：指定された作品を読む、課題への取り組みなど(180分／週)

授業計画

（１）詩の言語とは？

（２）和歌の伝統と日本語表現の特性について

（３）近代詩を読む―新しいリズム、イメージと日本の原風景(三好達治)

（４）近代詩を読む―切り詰めた表現から見えてくるもの(安西冬衛、北川冬彦)

（５）近代詩を読む―痛みを語る(萩原朔太郎)

（６）近代詩を読む―解放を語る(萩原朔太郎)

（７）近代詩を読む―語れないことを語る(尾形亀之助)

（８）近代詩を読む―叫びを語る(左川ちか)

（９）現代詩を読む―石原吉郎

(10) 現代詩を読む―高橋睦郎

(11) 現代詩を読む―谷川俊太郎

(12) 今の詩を読む―最果タヒ

(13) 今の詩を読む―ぱくきょんみ

(14) 私の好きな詩　1

(15) 私の好きな詩　2

＊参加者の関心に応じて変更の可能性あり。

成績評価基準

授業参加と発表 60%、課題提出 40%

教科書(参考書)

特に指定しない。

前期課程 2期 日本文化研究 Ⅳ
日本文学研究

エリス　俊子

授業概要並びに到達目標
（参加学生の希望により、変更する可能性あり。）
１期につづき、詩の言語について考察する。翻訳を通して、世界の詩作品に触れる。世界のさまざまな地域で、どのような詩作品が生み出されたのか。その表現方法にはどのような特性があるのか。また、それは、その地域の歴史的・文化的状況とどのようにかかわっているのか、狭義の詩的言語の考察を離れて、幅広く世界の歴史や文化についても考える機会としたい。

発表とディスカッションを中心に授業を進める。事前知識は必要ない。

準備学習：指定された作品を読む、課題への取り組みなど（180分／週）

授業計画
［授業計画］
（１）詩の言語と翻訳をめぐって
（２）日本語で読む世界の詩
（３）発表１（英語の詩）
（４）発表２（フランス語の詩）
（５）発表３（スペイン語の詩）
（６）発表４（ドイツ語の詩）
（７）発表５（中国語の詩）
（８）発表６（韓国語の詩）
（９）発表７（ロシア語の詩）
（10）発表８（ポーランドの詩）
（11）発表９（アラビア語の詩）
（12）世界の詩の多様性について
（13）詩の世界の普遍性について
（14）私の好きな詩　紹介
（15）私の好きな詩　紹介

成績評価基準
授業参加と発表 60%、課題提出 40%

教科書（参考書）
参考文献『愛、もしくは別れの夜に』（亀山郁夫・エリス俊子編）名古屋外国語大学出版会

前期課程 2期 グローバルスタディーズ研究 Ⅰ
国際関係と外交

山田　文比古

授業概要並びに到達目標
元外交官の教員とともに、外交問題の事例研究を行い、外交政策の検証と政策提言を行う。

授業計画
第１回：ガイダンス
第２回～14回：３～５件のテーマを教員と受講生とで相談の上決定し、各テーマにつき、①事例研究（受講生による研究発表）、②外交政策の検証（討論）、③政策提言（討論）を行う。
第15回：まとめ

授業は対面方式で行うが、例外として第14回目のみオンライン（Zoom）で行う。
プラットフォームとしては、グーグルクラスルームを使用する。

成績評価基準
成績は、授業の際の研究発表や討論など、授業への参加状況に基づき総合的に評価する。

教科書（参考書）
（参考書）『外交とは何か』山田文比古（2015）法律文化社
（参考書）『フランスの外交力』山田文比古（2005）集英社新書

前期課程 1期 グローバルスタディーズ研究 Ⅱ
国際マクロ経済とグローバルビジネス

複数教員制　　真家　陽一、林　慶雲

授業概要並びに到達目標
日本経済のグローバル化が進展する中、国際マクロ経済およびグローバルビジネスを学ぶ重要性が高まっている状況を踏まえ、マクロ・ミクロの両面から国際マクロ経済およびグローバルビジネスに関する理解を深めることを目指す。
前半の講義では、国際マクロ経済学について学んでいく。具体的には、日本経済との結びつきが強いいくつかの国・地域をピックアップし、その国の経済事情やビジネス慣行、代表的な企業のグローバル経営についてケーススタディを行う。後半の講義では、世界第２位の経済大国であり、日本との経済関係も緊密な「中国」とのビジネスを中心に、ケーススタディを行う。本講義は学生の主体的かつ積極的な参加を強く求めるため、履修前に経済・ビジネスに関する十分な知識を習得済みであることが望ましい。今年度は原則として対面による授業を実施する。ただし、第14回はオンラインとする。

授業計画
１回　オリエンテーション（林、真家）
２回　アメリカの経済事情（林）
３回　Southwest Airline の企業経営（林）
４回　Walt Disney の企業経営（林）
５回　Starbucks の企業経営（林）
６回　ASEAN の経済事情（林）
７回　インドの経済事情（林）
８回　オーストラリアの経済事情（林）
９回　ケーススタディ①（概論、自動車）（真家）
10回　ケーススタディ②（電機）（真家）
11回　ケーススタディ③（化学、医薬）（真家）

12回　ケーススタディ④(卸売・小売①スーパー・コンビニ)(真家)
13回　ケーススタディ⑤(卸売・小売②アパレル・生活用品)(真家)
14回　ケーススタディ⑥(食料品)(真家)
15回　課題演習と後半の授業のまとめ(真家)

成績評価基準

前半の講義は、毎回の講義で簡単な感想文を書いてもらい、前期のレポートを提出することを求める。感想文及びレポートに基づいて評価する。
後半の講義は、毎回の講義に基づく学生からと発表と討論への取り組み状況および課題演習などによって総合的に評価する。

教科書(参考書)

前後半の講義とも、教科書は使用せず、プリントを配布する。

前期課程 2期 | グローバルスタディーズ研究 Ⅲ 国際政治・紛争・平和構築

高瀬　淳一

授業概要並びに到達目標

Discuss on the theories of international relations by reading academic papers.

到達目標：現代の国際政治ならびに紛争・平和に関する理論について、英語の学術文献を読み進めながら議論する。
専門的文献を英語で読み抜く力を身につけるとともに、国家と国際関係の現状と未来について多角的に検討できる能力を養う。

なお、到達目標に鑑み、本講義の受講者には論文読解に必要な英語力、ならびに適切な日本語能力が求められる。
また、国際政治・紛争・平和問題に関する学説等の基礎知識(国家公務員試験(大卒)レベル相当)がすでにあることを受講条件とする。
大学院の講義であるので、毎回、社会科学的かつ論理的に発言することが求められる。
途中、何回か研究報告が求められる。
毎回の課題についての準備には120分程度の自宅学習が必要となる。

授業計画

1回　受講に必要な知識の確認(英語力ならびに学部レベルの国際関係論の基礎知識の有無の確認、評価する理論のついての報告)

【国際関係の現状をめぐる理論的分析】
2回　realism 論の有効性
3回　realism 論の限界
4回　regime 論の有効性
5回　regime 論の限界
6回　structuralism について
7回　その他の理論について
8回　国際政治理論の最新動向(研究報告)

【紛争と平和に関する理論的検討】
9回　安全保障政策について
10回　平和構築について
11回　globalism について
12回　国際連合の現状と課題について
13回　G７/ G20メカニズムについて
14回　国際社会の将来像(研究報告と議論、オンライン実施)
15回　まとめ(小論文等についての指導を含む)

成績評価基準

成績は、毎回の英語文献の読解と振り返り課題の提出、ならびに最終研究報告(論文提出を含む)をもとに、総合的に判定する。

教科書(参考書)

講義では英語の学術論文の一部をプリントして用いる。

前期課程 1期(集中) | グローバルスタディーズ研究 Ⅳ 公共政策とガバナンス

平山　恵

授業概要並びに到達目標

公共政策の理論に関する文献購読を行いながら、学生に身近な課題についての政策策定手法の模擬演習を行う。

授業計画

1.　「公共政策」とは何か
2.　国際公共政性
3.　演習：理念設定
4～5.　政策の決定
6.　演習：現状把握
7.　課題別政策：安全保障
8～9.　政策の決定
10.　演習：未来予測
11.　安全保障
12.　地球環境
13.　演習：方策設定
14.　学生の発表
15.　総括

成績評価基準

輪読分担及び討論を通した知識理解　40%、政策手法演習 40%、政策分析発表および他の学生へのコメント 20%

教科書(参考書)

庄司真理子、宮脇昇、玉井雅隆　編著『新グローバル公共政策』晃洋書房　2021

前期課程 1期(集中) グローバルスタディーズ研究 V 国際社会と国際法

山形　英郎

授業概要並びに到達目標

国際社会の平和と安全を維持するために国際連合が設立された。国際連合憲章は、武力行使を禁止し、集団安全保障体制を導入し、国際平和を維持する制度を構築した。しかし、現実には、国連創設以来武力行使の事例は枚挙にいとまがない。国際法の基本原則である武力行使禁止原則を中心に、国連安全保障体制について理解し、現実に生起している武力紛争について国連憲章を正しく適用することができる能力を身につける。その上で、国際法を通して国際社会の実態を分析することができるようになることを目標とする。

毎回、参加者との対話を通じて授業を進めていく。講義を行うが、受講する学生から随時質問を受け付け、回答を行う。疑問点を残さないよう授業を進めていきたい。

授業計画

01. 国際法の基礎を学び、国連集団安全保障体制を概観する。
02. 国際連盟の集団安全保障体制を理解し問題点を分析する。
03. 国際法上の基本原則である武力行使禁止原則を解剖する。
04. 武力行使禁止原則の例外である自衛権について検討する。
05. 個別的自衛権と集団的自衛権発動の要件を比較検討する。
06. 主権平等から導き出される不干渉原則を理解し運用する。
07. 国連憲章第６章における平和的紛争解決制度を概観する。
08. 国連安保理及び総会における決定手続きを十分理解する。
09. 冷戦期における安保理麻痺に対する対処方法を研究する。
10. 平和維持活動が第６章半の措置と呼ばれる理由はなにか。
11. 安全保障理事会が制裁措置を執るのはどのような場合か。
12. 安全保障理事会が軍事的強制措置を執るための要件とは。
13. 軍をもたない国連が軍事的強制措置を執るにはどうする。
14. 非軍事的強制措置の実態を検証し法的問題点を洗い出す。
15. 以上の検討を踏まえ、国連は国際法の主体であるか否か。

成績評価基準

国際法や国連憲章に関する基礎的な知識を得ることができれば合格(C)。その知識を具体的な事例に適用することができれば(B)。国家間あるいは研究者の間で意見が相違する対立点を理解し、どうした背景からそのような相違が生じてているのかを理解した上で、自己の見解を提示できれば(A)。授業での報告及びレポートから判断する。

教科書(参考書)

David Harris and Sandesh Sivakumaran ed., Cases and Materials on International Law 8 th ed., Sweet & Maxwell (2015).　ただし購入の必要はない。

参考書として、松井芳郎『武力行使禁止原則の歴史と現状』日本評論社(2018)、山形英郎編『国際法入門』(第２版)法律文化社(2018年)。

前期課程 2期 グローバルスタディーズ研究 VI 開発とグローバルイシュー

佐藤　都喜子

授業概要並びに到達目標

授業概要：

SDGs の枠を使って「持続可能な開発」に関わるグローバル・イシューについて学ぶ。国際協力の専門家として約25年間に渡って現場で働いた講師の経験を基に、臨場感ある授業を進める。

学習目標：

「持続可能な開発」とそれに関わるグローバル・イッシューについての知識を深める。特に「ジェンダー」については力を入れる。

準備学習：

1．次回の授業に関する指定資料を読んで、概要をまとめておくこと(週当たり60分)
2．授業を振り返りながら、推薦された授業のテーマに関する文献を読む(週当たり120分)

授業方法：

講義・演習・抄読を交えて進める。第14回はオンライン(zoom)で実施する。

授業計画

第１回：オリエンテーション、開発のアクター①(ODA・二国間援助)
第２回：開発のアクター②(国際機関)
第３回：SDGs とは何か？　政府、企業、自治体、生活者の視点からの SDGs
第４回：北野収(2017)『国際協力の誕生』２章、４章　(抄読)
第５回：北野収(2017)『国際協力の誕生』６章、７章(抄読)
第６回：北野収(2017)『国際協力の誕生』８章(抄読)
第７回：１．さまざまな開発論と戦後の開発論の変遷、２．援助潮流の変化と今後の展望
第８回：グローバリゼーション、貧困と格差
第９回：事例：マレーシアの零細漁民
第10回：ジェンダー①：事例：バングラディッシュ女性の現状
第11回：ジェンダー②：女性のエンパワメントへの道のり
第12回：ジェンダー③:女性のエンパワメントとマイクロ･ファイナンス(英語抄読)
第13回：ジェンダー④：分析手法
第14回：ジェンダー⑤：事例：ケニアの移住女性が直面する問題
第15回：ジェンダー⑥：リプロダクティブ・ヘルス　理論と実践
課題レポートについての発表

成績評価基準

・プレゼンの内容(40点)
・自身の関心あるテーマに関するレポート 4000字(60点)

教科書(参考書)

授業内で使う書籍：

北野収(2017)『国際協力の誕生―開発の脱政治化を超えて―』創成社

基礎知識取得のための推薦図書：

南博、稲葉雅紀(2020)『SDGs―危機の時代の羅針盤』岩波新書

明石康(2006)『国際連合―奇跡と展望』岩波新書

細谷雄一(2013)『国際秩序―18世紀ヨーロッパから21世紀アジアへ』中公新書

峯陽一(2019)『2100年の世界地図―アフラシアの時代』岩波新書

前期課程 1期 ワールドヒューマニティズ研究 I グローバルヒストリー研究

鈴木　茂

授業概要並びに到達目標

新しいマイノリティ論によって注目を集めている Justin Gest（ジャスティン・ゲスト）の新著、Majority Minority（New York: Oxford University Press, 2022）を輪読します。

米州（ニューヨーク、トリニダード・トバゴ）、中東（バーレーン）。インド洋（モーリシャス）、東南アジア（シンガポール）、太平洋（ハワイ）が扱われており、日本との比較を意識して、マイノリティー論のグローバルな展開を理解することが目標です。

合わせて、学術論文の形式、文体、語彙に慣れることも目標とします。

授業計画

各章ごとに担当を決め、報告と討論を行います。

成績評価基準

平常点で評価します。

教科書(参考書)

Justin Gest, Majority Minority (New York: Oxford University Press, 2022).

こちらで用意します。

参考書：ジャスティン・ゲスト『新たなマイノリティの誕生：声を奪われた白人労働者たち』弘文堂、2019年

前期課程 2期(集中) ワールドヒューマニティズ研究 II 多言語多文化研究

奈良　雅美

授業概要並びに到達目標

グローバリゼーションの拡大と深化とともに変容を続ける世界において、多様な文化と言語の人々があるいは多様な主体が影響を及ぼし合っている。この授業では、これらの事象を重層的で動的な関係性として捉え、「多文化社会」をより深く理解できるよう、分析視点を広げる。

コースの前半は、国際文化論、国際社会論の視点から、「多文化社会」を位置付けて解説する。後半では、日本の多文化社会をジェンダーの視点から捉え、グローバリゼーションの中で、多文化共生がジェンダー平等とどう融合しうるのかを考える。

授業の目標は、第一に「多言語・多文化」に係る事象を俯瞰して理解する力を養うこと、第二に、多言語・多文化の社会の諸課題をジェンダーの視点で理解できるようになることである。

授業計画

1　授業の概要、進め方、授業意図のバックグラウンドの説明など
2　国際文化論からの考察①文化とはなにか
3　国際文化論からの考察②グローバル化の中の文化
4　国際文化論からの考察③文化の変化
5　国際文化論からの考察④文化の接触と変容
6　国際文化論からの考察⑤文化の受容と抵抗
7　国際文化論からの考察⑥人の国際移動
8　ジェンダーとはなにか
9　ジェンダーと多文化共生①ジェンダー平等との連関性
10　ジェンダーと多文化共生②対立あるいは変容
11　ジェンダーと多文化共生③複合差別
12　振り返りのディスカッション
13　事例：日本に住むフィリピン女性のライフヒストリーを読む
14　事例：マイノリティの学びの保障（映画「こんばんはⅡ」視聴）
15　全体の振り返りとディスカッション

＊授業の進行状況により順番を入れ替えたり、内容を変更する場合もある。

成績評価基準

平常点30%（ディスカッションでの意見、対話の状況から）

レポート70%（最終回で課題を提示する）

教科書(参考書)

教科書は指定しないが、以下を参考文献として挙げる。

適宜抜粋して授業で配布する。

平野健一郎『国際文化論』東京大学出版会、2000年

関根政美『エスニシティの政治学』名古屋大学出版会、1994年

辻村みよ子・大沢真里編『ジェンダー平等と多文化共生』東北大学出版会、2010年

前期課程 2期 ワールドヒューマニティズ研究 III 宗教・民族・エスニシティ

髙村　美也子

授業概要並びに到達目標

この授業では、エスノグラフィーおよび人類学の手法を用いて、世界の宗教、民族、エスニシティの概念を学び、アフリカおよびヨーロッパを中心とした各地域の社会の実態を学ぶ。

15回の講義を通し、世界で起こっている社会の現状と問題を発

見し、それをどのように捉えていくか考察する。
受講生は、世界で起こっている民族問題について自ら課題を見つけ出し、文献調査を実施し、その調査内容を授業内で発表する。

授業計画

1　講義内容の説明と計画
2　世界の民族とエスニシティ
3　国家、国民、民族
4　世界の言語
5　世界の宗教１　文明と３大宗教
6　世界の宗教２　人類学で扱われる宗教
7　民族の土着信仰、慣習
8　アジアの歴史
9　アフリカの歴史
10　大航海時代から現在の人の移動
11　ディアスポラの人びとの暮らし
12　宗教・民族・エスニシティ（発表）①
13　宗教・民族・エスニシティ（発表）②
14　宗教・民族・エスニシティ（発表）③　リアルタイム双方向型
15　宗教・民族・エスニシティ（発表）④

成績評価基準

課題　30％
レポート　70％

教科書（参考書）

なし
随時プリントを配布する

前期課程 2期 ワールドヒューマニティズ研究 Ⅳ 世界文化と表象

複数教員制　　**林　良児、亀山　郁夫**

授業概要並びに到達目標

表象〈representation〉とは「きわめて多義的な言葉」であると言われる。しかし、絵画、音楽、映画、文学、演劇などの分析をつうじて、人間への理解やこの世界の解釈に向かおうとするとき表象はその意味を持つようである。
この授業は、二名の教授者が、現在関心を寄せている分野から固有のテーマを選択しリレー形式で講義する。それらが一つのゆるやかなまとまりとなって受講生諸氏の研究の在り方になんらかの異なる視点を示唆することができれば幸いである。

１回、２回、３回、４回、５回、６回、７回、８回、９回、10回、11回：林
12回、13回：亀山
14回、15回：林

授業計画

１回：講義内容の説明と計画の提示。ラマルチーヌの詩（林）
２回：ユゴーの詩（林）
３回：ダヴィッドの絵（林）
４回：フリードリヒの絵（林）
５回：ボードレールの詩（林）
６回：コローの絵（林）
７回：マラルメの詩（林）
８回：ミレーの絵（林）
９回：アポリネールの詩（林）
10回：シャントルイユの絵（林）
11回：プルーストの小説（林）
12回：世界文化と表象１（亀山）
13回：世界文化と表象２（亀山）
14回：モディリアニの絵〈オンライン授業〉（林）
15回：まとめ（林）

なお、授業内容は多少前後・変更することがある。

成績評価基準

期末レポートとプレゼン50％、課題への対応25％、授業への取り組みと貢献25％。それらを総合的に判断して評価する。

教科書（参考書）

プリント等を使用

前期課程 1期 ワールドヒューマニティズ研究 Ⅴ 世界文学と批評

木村　茂雄

授業概要並びに到達目標

世界の英語文学の解釈や批評について学んでいきます。カリブ、アフリカ、インドなどの英語圏作家の短編小説を、歴史、社会、文化、ジェンダーなどのコンテクストから検討することにより、文学作品だけでなく、広い意味での文化的なテクストを解釈し、批評する力を身につけていきます。受講生は、授業で取り上げるテクストを丁寧に予習して授業に臨みます。また、各授業の発表担当者には、テクストの内容、その解釈、疑問点などを発表してもらいます。このような学習をとおして、修士論文執筆のための批評力を深めていきます。

授業計画

第１回　ガイダンス
第２回　Jean Rhys, “The Day They Burned the Books”
第３回　V.S. Naipaul, “The Baker’s Story” ①
第４回　V.S. Naipaul, “The Baker’s Story” ②
第５回　Neil Bisoondath, “Veins Invisible” ①
第６回　Neil Bisoondath, “Veins Invisible” ②
第７回　第２回～第６回のまとめ
第８回　Ngugi wa Thiong’o, “A Meeting in the Dark“ ①
第９回　Ngugi wa Thiong’o, “A Meeting in the Dark“ ②

第10回　Abioseh Nicol, “The Truly Married Man” ①
第11回　Abioseh Nicol, “The Truly Married Man” ②
第12回　第８回～11回のまとめ
第13回　Saadat Hasan Manto, “Toba Tek Singh”
第14回　（オンライン）Salman Rushdie, “The Free Radio” ①
第15回　Salman Rushdie, “The Free Radio” ②

成績評価基準

発表など授業への取り組み 60%、学期末レポート 40%

教科書（参考書）

教材はプリントで配布します。参考書は適宜授業で示します。

前期課程 2期　ワールドヒューマニティズ研究 Ⅵ　トランスレーション研究

甲斐　清高

授業概要並びに到達目標

「文芸翻訳の理論と実践」
この授業は、翻訳という行為にともなう諸問題を検討しながら、英語で書かれた文学作品を日本語に翻訳する、という実践を経験することを通して、実践的な翻訳力を身につけていくことを目的とする。単に英文を日本語で解釈するのではなく、実際の「翻訳」とはどのようなものかを意識的に考察していく。文芸翻訳の特殊性を理解するために、他のジャンルのテキストも翻訳の題材とする。授業の中、および課外で、文学作品の翻訳を進めていき、最終的にレポートを添えて翻訳作品を提出する。
受講者は、毎週与えられる翻訳課題を完成させて、次の授業にのぞまなければならない。
授業は、対面で行うが、資料の配布や課題の提出等は、Google Classroom から行う。

授業計画

第１週　イントロダクション：翻訳とは何か
第２週　直訳と意訳
第３週　辞書やその他のツールの活用
第４週　語句の意味と翻訳
第５週　起点テキストの種類、翻訳の目的
第６週　翻訳実践（省略）
第７週　翻訳実践（品詞の転換）
第８週　翻訳実践（順送りと逆送り）
第９週　翻訳実践（複雑な文への対応）
第10週　翻訳実践（話法）
第11週　翻訳実践（無生物主語、態）
第12週　翻訳実践（文化の違い）
第13週　翻訳実践（表記の問題）
第14週　翻訳実践（推敲）
第15週　まとめ

成績評価基準

授業内での取り組み40%、翻訳作品とレポート60%。

教科書（参考書）

プリント配布。

前期課程 2期　情報コミュニケーション研究 Ⅰ　ジャーナリズム・メディア論

鶴本　花織

授業概要並びに到達目標

インターネットが優勢的である昨今において、五感（「味覚」・「聴覚」・「嗅覚」・「視覚」・「触覚」）の中でも特に「視覚」に支配される社会体制の中で我々は生活を送り続けている。この状況に呼応し、漫画・映画・広告などのビジュアルテキストを研究資料としてどう扱うべきかが特に20世紀後半以降、学問的に議論された。その結果として考案された分析方法を「記号学分析」と呼ぶが、この授業では、主にさまざまな映画を取り上げ、記号学分析のやり方を教授する。ビジュアルテキストを用いて研究を進めることを視野に入れている場合は、この授業を受けると良いだろう。記号学分析の手法を導入後、「戦争」・「家族」・「女性」の表象の分析を教員が選んだ映画をネタにグループ・ディスカッションを通して分析する。その後、受講生が選んだ映画を用いて個人発表を行い、学習成果を示す。

授業計画

1．オリエンテーション
2．記号学分析の基礎
3．記号学分析の基礎
4．戦争：『西部戦線異状なし』2022
5．戦争：『野火』2014
6．戦争：『ハクソー・リッジ』2017
7．現代家族：『パラサイト　半地下の家族』2019
8．現代家族：『ジョーカー』2019
9．救世主としての女性：『エイリアン』1979
10．救世主としての女性：『プロミシング・ヤング・ウーマン』2020
11．救世主としての女性：『ラブリー・ボーン』2009
12．学生お薦め作品
13．学生お薦め作品
14．学生お薦め作品（オンライン形式）
15．学生お薦め作品

成績評価基準

グループ・ディスカッションおよび個人発表

教科書（参考書）

授業でハンドアウトを配布する

前期課程 2期 情報コミュニケーション研究 Ⅱ 情報システムと AI

若山　公威

授業概要並びに到達目標

【授業概要】
プログラミング言語 Python を用いて、テキストの基本的な処理方法を学ぶ。さらに、テキストデータ収集と分析方法について学ぶ。
受講にあたっては、Python による基本的なプログラムを作成できることが望ましい。具体的には、変数、if 文、for 文、リスト、辞書、関数といった事項を理解していること。
受講者全員が順番に発表者となり教科書の輪読を行うことで、内容をしっかり理解していってもらう。

【到達目標】
・Python による基本的なテキスト処理ができる
・Python によるテキスト収集・分析プログラムを理解できる

【準備学習】
次回の授業に関する教科書の該当範囲を読んで、関連事項を調べておく　180分
輪読の担当回は、さらに、資料作成や発表準備の時間が必要となる

授業計画

14回目はオンライン方式、その他の授業回は対面で行う。

1回目　ガイダンス
2回目　Python 復習
3回目　基礎技術
4回目　データ収集
5回目　観光テキストの解析
6回目　観光テキストの解析演習
7回目　金融・経済テキストの解析
8回目　金融・経済テキストの解析演習
9回目　ソーシャルメディアテキストの解析
10回目　ソーシャルメディアテキストの解析演習
11回目　応用技術
12回目　単語分散表現
13回目　文分散表現
14回目　総合演習
15回目　最終レポート

成績評価基準

毎回授業の課題・輪読　　70%
最終レポート　　30%

教科書(参考書)

【教科書】
榊剛史 編著　石野亜耶・小早川健・坂地泰紀・嶋田和孝・吉田光男 著
『Python ではじめるテキストアナリティクス入門』、講談社、2022年

前期課程 2期 情報コミュニケーション研究 Ⅴ 英語通訳スキル

浅野　輝子

授業概要並びに到達目標

国際社会で活躍できる通訳 基礎知識からトレーニング法まで
1：このクラスは、通訳の基礎理論を習得した後、逐次、同時通訳ができるまでの能力を養成することを目的とした通訳コースである。
2：名古屋外国語大学主催で毎年開催している「全国学生通訳コンテスト」のスクリプトをまとめた「通訳ワークブック」をテキストに、多文化社会の現場での逐次通訳スキルを音声教材を用いて指導する。
3：国際化が進むにつれて、異文化コミュニケーターとしての通訳の需要は年々高まってきている。このコース終了後、学生が国際会議などのボランティア通訳、ガイド通訳エスコート通訳として活躍できるようになる事。

基本は日進キャンパスのＥ30同時通訳室にて対面で行いますが、14回目の授業はオンライン(Zoom)で行います。

授業計画

第1回　履修に関するガイダンス・オリエンテーション　通訳とは(通訳基礎理論)
第2回　用語の整理―移民とは
第3回　国際移民の歴史
第4回　人口統計と移民
第5回　日本人移民史
第6回　移民による文化的影響とアイデンティティ
第7回　移民政策
第8回　移民と経済
第9回　移民と教育
第10回　移民と庇護希望者
第11回　非正規移民問題
第12回　移民とシティズンシップ
第13回　移民と国際機関
第14回　多文化社会としての日本(オンライン)
第15回　まとめ

成績評価基準

授業中の通訳訓練および態度、宿題の評価を全体の40%、通訳実技を60%とする。

教科書(参考書)

「世界のトピックで学ぶ　通訳ワークブック」浅野輝子他、名古屋外国語大学出版会

前期課程 1期	情報コミュニケーション研究 Ⅵ 中国語通訳スキル

岩佐　一枝

授業概要並びに到達目標

授業概要：

1．中国語の音声データを聞き、即座に適切な日本語に変換していくトレーニングを行う。
2．様々なトピックに対応できるよう、多彩なテキストに触れながら、語彙力の強化を図る。
3．往々にして時間的制限を伴う通訳の場において、言語の背景にある日中両国の文化・社会の差異や有り様を、如何に簡潔かつ端的に表現できるか、毎回の講義で追究する。

※講義内容に関連する語彙について、毎回自分で調べておくこと。課題文が予め配布されている場合は、日本語訳を考えておくこと。(自習時間約180分)

到達目標：

中国語を聞いて、迅速に、自然で分かり易い日本語に訳していけるようになること。
文法や語彙、発音なども更なるブラッシュアップを目指す。

授業計画

1．オリエンテーション：講義の内容、進め方の説明。
（Needs assessment の実施により、講義で扱うトピックを決定する）
2．世代の違いや方言差異が認められるテキストの扱いについて。
新語、スラングなどについて。
3．中国社会に関するトピックの通訳訓練。
4．中国文化に関するトピックの通訳訓練。
5．現代中国事情(政治)に関するトピックの通訳訓練。
6．現代中国事情(経済)に関するトピックの通訳訓練。
7．この半期で最も印象に残った人物・出来事についてのディスカッションを同時通訳。
8．日本社会に関するトピックの通訳訓練。
9．日本文化に関するトピックの通訳訓練。
10．現代日本事情(政治)に関するトピックの通訳訓練。
11．現代日本事情(経済)に関するトピックの通訳訓練。
12．自分の好きな日本の土地・風物を宣伝する。
13．台本なしの話し言葉：インタビューを通訳する。
14．自分の故郷を紹介する。　（オンライン）
15．総括

※なお、本講義は、課題の提示とフィードバックについては「Classroom」を使用する。初回講義までに、履修登録完了者に対し、Classroom のクラスコードについて通知するので、各自登録を完了しておくこと。
※また、第14回講義はオンラインで、それ以外の講義は全て名駅キャンパスにて対面で行う。オンライン講義は zoom で行うが、その際の zoom リンクは Google Classroom 上で告知する。

成績評価基準

講義での発言内容・取り組み　50%
課題の内容、小テストの結果　50%
なお、課題提出期限に遅れた者、課題に剽窃行為が認められた者の成績評価は一切行わない。特に、剽窃行為については、発覚時点で欠格とし、その後の授業への参加を認めない。よって、課題作成において参考文献、並びに引用部分がある場合は、必ずこれを明記すること。

教科書(参考書)

講義中に資料を適宜配布、或いは PDF 書類をアップロードする。PDF 書類は、必ず講義までにダウンロードしておくこと。